

て実施している。更に、昼夜間人口差の大きい千代田区丸の内消防署では、他の地域で一般的な町会単位の住民向け防災訓練ではなく、自衛消防訓練が震災対策訓練の中心となるように、防災訓練のあり方そのものにオフィス街という地域性が反映されている。

これらの結果は、防災都市づくりの中で、防災訓練がソフト面での防災対策と位置付けられてい

ることと関わってくるのではないか。一方で、住宅や道路といった施設に関する地域性であるハード面での危険は、施設の耐震化や都市計画での土地利用計画など、防災対策のほかの場面に反映されている。防災訓練は「人」を通した防災対策であるために地域性の中でも「人」に関するソフト面が強く反映される場面なのである。

## 大塚モスクに集まる日本人ムスリム女性の日常生活

名木田 芙美

世界第2位の人口を占めるイスラームの信者も、日本では数が少ない。ただ近年、イスラーム圏からの移住者や、日本人の改宗者が増えていることによって、日本における信徒数は増加傾向にある。それに伴って各地にイスラーム団体や宗教施設ができ、宗教活動の場や、共同体としてのネットワークとして活用されるようになってきている。しかし、一般の日本人にはその姿はまだ見えづらいものであり、彼等が実際どのように生活しているのかは知られていない。

本研究は、イスラームの教えが日本においてどのように展開されているかを、日本とイスラームの関わりの歴史や、現在の施設・活動の状況を探ることによって明示しようとしたものである。本研究に関する調査は、東京都文京区にある大塚モスクを中心に行った。大塚モスクでは、様々な勉強会が開かれており、一般の人の参加も歓迎していた。

イスラームの教えは、信者に信仰と同時に多くの戒律の遵守を求める。イスラーム文化の根付いていない、周りが非イスラームという環境の中で、この宗教を選択した日本人信者たちは、どのように現実の困難と信仰の折り合いをつけ、暮らしているのだろうか。筆者は、特に女性信者に焦点を当て、女性信者による、日本人向けのクルアーンを学ぶ会に参加し、聞き取り調査を行った。

彼女たちと関わっていく中で、見えてきたものは、①結婚によってやむなく改宗したのではなく、もっと積極的な姿勢でイスラームに関わっていること、②イスラーム教の根本にあるのは、アッラーによる庇護と「やさしい互助制度」であること、③信者同士の助け合いは盛んで、モスクの人間関係は非常にやわらかなものであり、戒律の厳しさによる圧迫感を感じられないこと、④女性たちは、現実生活との折り合いにおいて工夫し解決していくことに、むしろ前向きな気持ちを持っていることなど、予想に反する「共同体」としてのあり方であった。

ただ、モスクの運営は男性が中心で女性は従の立場にあることに対し、女性の視点が入ることで、より発展するのではないかも感じた。そして彼女たちが、親族との関係や子供の教育には課題が多いと感じていること、などモスク共同体の課題も浮かび上がってきた。

このような問題の解決に向けて、今後、布教活動としてではなく、イスラームをどのように広報し、また交流活動を展開していくかが必要になってくると思われる。そうすることによって非イスラームからの理解と協力も得られるであろう。モスクが特殊なものではなく、地域に受け入れられるものとなるには、日本人であり地域生活者である女性たちにかかる部分が大きいと感じた。